キズナエピソード

百波瀬 ここあ　5話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

医者が言っていたとおり、一週間ほど安静したところで

和哉と達哉の容態は快復に向かった。

今ではいつも通りの元気ではしゃぎまわっているそうだ。

そして、ここあのお父さんがぜひともお礼を言いたいそうで、

都合のいい日に来てくれないか、とここあから打診された。

//次ページ

別に当然のことをしたまでだ。お礼なんて必要ない。

と一度は思ったものの、

少し考えてから、俺はここあの父親と会うことを決めた。

こっちとしても、伝えておきたいことがあった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//ここあの家・リビング

［ここあ］

「とびお来てくれたね～。今日はありがと。

さ、あがってあがって。

お父さ～ん、とびおくんのご到着だよ～」

［とびお］

ここあはとっくに元気を取り戻したようで、

いつもの調子で俺を出迎えてくれた。

そのまま腕を引いてリビングへと案内してくれる。

［とびお］

そこに座っていたのは、厳格な様子の男性だった。

大きな四角いメガネの向こうから俺を見つめている。

［とびお］

「はじめまして。とびおです」

［ここあの父］

「あぁ、君がとびおくんか。

子供たちからいつも話は聞いてるよ。

さ、そこに座ってくれ」

［とびお］

促されるままに、俺は対面に腰を下ろした。

ここあはというと、お茶を汲みに行ってしまい、

俺は彼女の父と2人きりになる。

［とびお］

俺が緊張していると、

ここあの父は大きく頭を下げてきた。

［ここあの父］

「とびおくん、今回は本当にありがとう。

和哉と達哉が今も元気でいられるのは君のおかげだ」

［とびお］

「そんな、大げさですよ。顔を上げてください。

別にお礼なんていいですから」

［ここあの父］

「いや、そういうわけにはいかない。

大切な息子たちを救ってもらったんだ。

ぜひともお礼を言わせてくれ」

［ここあ］

「あはは～。

お父さん、こう言い出したら聞かないんだよねぇ。

とびおっち、お礼聞いてあげてよ」

［とびお］

やってきたここあが、お茶を振る舞いながら笑う。

言うなら、今しかない。

俺はつばを飲み込むと、意を決して口を開いた。

［とびお］

「……でしたら、俺へのお礼はいいですから、

もっとここあさんと一緒にいる時間を

増やしてくれませんか？」

［ここあ］

「え？」

［とびお］

「今回のときも、ここあさんすごく怖がっていたんです。

彼女のお母さんが亡くなられたときを思い出した、って」

［とびお］

「お仕事だったので仕方がないのはわかっています。

でもやっぱり、ああいう時は俺よりも父親が

そばに居てくれたほうが安心できると思うんです」

［ここあ］

「と、とびおっち！　急に何を言い出すんだよ～。

もう。そういうのはいいから、ね？」

［とびお］

ここあは恥ずかしがりながらも

場の空気を変えようとしていたが、

俺はここあの父の目をじっと見たまま譲らなかった。

［ここあの父］

「そんなことがあったのか……。

すまん、ここあ。お前はできる子だからって、

甘えすぎていたかもしれないな……」

［ここあ］

「ちょ、ちょっとお父さん、やめてよ。

そういうのいいからさ？

私はやりたくてやってるんだから、気にしないで」

［とびお」

「ここあさんが将来何になりたいか、知っていますか？」

［ここあ］

「と、とびおっち？」

［とびお］

「ここあさんは、将来デザイナーになりたくて、

そっち系の専門学校に通いたいそうです。

でも、お金の問題で諦めようとしています」

［ここあの父］

「なっ……。お前本当なのか？」

［ここあ］

「いや、まぁ、そうだけど……もういいの！」

［とびお］

「よくない！　ここあはもっと自由に楽しく生きていい！

抱えているものを投げ出せって言ってるんじゃない。

もっと自分の気持ちも大切にしろって言ってるんだ！」

［とびお］

「ここあにこれ以上無理させるわけにはいかない！」

［とびお］

俺が力強く言い切ると、ここあも押し黙る。

やがて、ここあの父が重々しく口を開いた。

［ここあの父］

「そうか……わかった。

ここあ、お前は専門学校に行け。

金の心配はしなくていい」

［ここあ］

「お父さん!?」

［ここあの父］

「親は子を心配するが、子が親に変な気遣いするんじゃない。

子どもは、自分の人生を生きたいように生きればいい。

それをサポートするのが親の役目だからな」

［ここあの父］

「それに大切な一人娘に窮屈な思いをさせては、

天国のあいつに顔向けできん」

［とびお］

ここあの父は顔を横に向けた。

その先には、仏壇に飾られた遺影があった。

［ここあの父］

「とびおくん、教えてくれてありがとう。

君の言うとおり、今後はもっと家にいるようにするよ」

［とびお］

そう言って、ここあの父は再び頭を下げたのだった。

//ADV形式終了

//5話END